

活躍する専門技術者に聞く①

宮下 勝典 氏（日本機工株式会社）



建設マスター 宮下 勝典（みやした かつのり）氏

11月号より10回連載で、内発協の自家用発電設備専門技術者資格を取得している方の中から、内発協推薦による建設マスター（優秀施工者国土交通大臣顕彰）受賞者を紹介していく。第1回は日本機工株式会社に所属し、優秀な電気工として建設マスターを受賞した宮下勝典氏（50歳）。これまでの苦労話や仕事観、自家発電業界で働く方へのアドバイスを伺った。

1. 宮下氏の業務経歴

オリンパスに勤務時代は工場の生産ラインのロボットの制御設計を担当、大倉冷機では見積書ソフトの開発に従事した。その後、日本機工に施工管理者候補として入社、メンテナンス課で自家発電設備の基礎を習得した後、技術課に異動。永年にわたり、とりわけ電気工学に詳しい発電設備の据付工事者として多数の現場経験を持つ。現在も工事現場の第一線に立ち、取締役工事部部长として後輩の指導育成にもあたっている。

自家用発電設備専門技術者（SKMの三部門）を平成8年に取得、併せて500kW未満の予備発電装置を取り扱う特種電気工事士や、1級電気工事施工管理技士等の資格も取得した。また平成23年に建設マスター（電気工）を受賞している。

2. 主な施工実績

宮下氏が施工に携わった物件は関東地方を中心に

内燃力発電設備の工事で150件を超える。

数多くの発電プラント工事の中で特に印象深いものとして語ってくれたのが、平成20年より3期にわたり行われた某テーマパークの非常用発電設備入替工事である。ディーゼル発電設備（計3,000kW）の据付工事責任者として現場で陣頭指揮を執った。

「主に『お城』に供給する発電設備の入替でした。65tクレーンを使用しての搬入施工でしたが、準備や清掃も含めた1日の作業時間が夜中の0時～翌朝5時までしか与えられないので、施工管理者として、段取り力が非常に鍛えられた現場でした。『お城』を汚損することは厳禁でしたので、自分も作業靴が汚れていないか始終気になっていました。」

施工工事は平成22年に無事に完了。宮下氏らが施工した発電設備は現在、テーマパークの重要な保安電源機能を担っている。

また、大手都市銀行各支店の発電設備施工でも宮下氏は多くの施工実績を持っている。30代～40代の時に延べ40店舗以上の支店を手掛けた。

「電機メーカーさんとタッグを組んで販売施工を行っています。銀行向け設備は主に100kVAクラスです。銀行は繁華街等の建物密集地に立地していますので、施工環境としては作業スペースも狭く厳しいです。クレーンでの吊り上げ搬入になりますが、夜間作業でしたので近隣住民や作業員の安全確保には特に気を遣いました。」

設置後の定期的メンテナンスも電機メーカーを通じ日本機工にて請け負っており、施主側が実施する計画停電に宮下氏自身も立ち合いを求められること



安全確保と工期遵守が鉄則と語る宮下氏



銀行へ納めた非常用ディーゼル発電設備

があるという。また、超高層ビルの先駆けである、霞ヶ関ビルのリニューアルに伴う非常用発電設備入替工事も宮下氏らが手掛けた。主な特徴として、省スペース化を実現した縦置円筒型地下貯蔵タンクを採用したことにより、BCP（事業継続計画）需要に適合した設備増強を図ることができたとしている。

3. 業務上心掛けていること

施工現場の第一線で活躍してきた宮下氏が、業務上特に心掛けていることは、「作業員の安全確保」と「工事工程の遵守」の両立だという。いかに職人の方が残業をせずに工期を守れるかについて日々考えるとともに、作業工程の緻密化やコミュニケーションの強化を図り、対処しているという。

4. 後進への助言

後輩社員に対しては、宮下氏の若手時代の実体験に基づいた成功事例や失敗事例について話し、指導を行うことで説得力を持たせるのだという。以下はご自身の失敗談。

「私が入社5、6年目の頃、発電設備更新に伴うビルへの排気ダクトの搬入で、事前にルートをよく確認しなかった為、エレベーターの手前の扉でダクトが引っ掛かり楊重出来なくなりました。ゼネコンさんにはこっぴどく怒られましたね。詰めの甘さが出た結果です。40代になって部下の指導を本格的に任される様になりました。現場でのOJTが基本ですが、後輩を指導することにより、自分も成長していく経験を得ました。」

また、良き先輩に恵まれたことも、施工管理者として成長出来た理由だという。

「早川元社長（日本機工の二代目社長）が工事部部长時代に、私は直属の部下として色々な指導を受けてきました。早川自身も数多くの難しい施工工事を手掛けてきたベテラン施工技術者で、その様な経



施工現場での朝礼風景（左から3人目が宮下氏）

験豊富な上司の下で業務経験を積むことが出来たことは大変幸運でした。」

後輩には失敗からも多くのことを学んで欲しいと語るとともに、技術指導の面では、特に以下のことを指摘している。

「機械器具設置工でも、シーケンスを正しく読めなければダメです。自分の経験分野だから話す訳ではありませんが、発電機もどんどん電子制御化しています。その為、施工技術者も『弱電』について強くなければならないと部下には語っております。」

5. 自家発業界で働く方へ

最後に、自家発業界に携わっている方へ伝えたいことや、アドバイスを頂いた。

「現実に稼働する機会は少ないけれど、非常用発電設備は、いざと言う時に機能を発揮する重要なインフラ電源です。社会に対して非常に誇れる仕事です。据付工事が終わったら、いざと言う時、いつでも発電機が起動し送電できなければならないことを自覚して業務に取り組んで欲しい。」

協力会社や施主からも大きな信頼を寄せられている宮下氏。取締役として経営全般にも関わり多忙な日々を過ごしているが、今後も専門技術者の模範として、施工の合理化の推進や、後進への指導・育成等に向けてさらなる活躍が期待されている。